



手話言語研究センター文化イベント

2017年5月14日開催

関西学院大学手話言語研究センター

目次

総合司会 森本 郁代 (関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長)	
開会の辞.....	2
山本 雅代 (関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長)	
前座.....	3
櫻鶯亭 球箱 (おうおうてい ぼるぼっくす) (関西学院大学 甲山落語研究会)	
演目：『鶴』	
櫻鶯亭 右蝶 (おうおうてい うちょう) (関西学院大学 甲山落語研究会)	
演目：『蝦蟇 ^{がま} の油 ^{あぶら} 』	
手話落語.....	6
デフー福 (でふいっぷく) (上方手話落語会代表)	
演目：『芝浜』、『大仏のほくろ』	
対談.....	7
デフー福 (上方手話落語会代表)	
櫻鶯亭 球箱 (関西学院大学 甲山落語研究会)	
櫻鶯亭 右蝶 (関西学院大学 甲山落語研究会)	
根岸 紳 (関西学院大学名誉教授)	
モデレーター 森本 郁代	
閉会の辞.....	19
松岡 克尚 (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)	
登壇者紹介.....	22

開会の辞

山本 雅代（関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長）

○山本 ただいま紹介に預かりました、センター長の山本と申します。

これから皆さんは、大変楽しい、興味深い落語の話を伺うことになるかと思いますが、その前に一言ご挨拶させていただきます。

センターの事業も今年で2年目を迎えました。手話が初めての方には、手話に慣れ親しんでいただく、あるいは普段、手話を使われている方々には、私たちはこういう活動をしているので御支援よろしくお祈いしますという、色々な意味を込めて、様々な事業を行っております。

今年度は、まず落語です。私は寄席に行ったことは一度もないのですが、昔々、まだラジオが幅をきかせていた頃に、ラジオで落語を聞いたりしまして、そういう意味で落語に親しみがある人間です。

音声に頼っている私たちは、耳を使って落語を楽しみます。ただ、落語の場合は手や顔や色々な表情を使う、そういう古典的な日本の大切な文化です。ですので、本日は、耳が聞こえる方々には音声と表情や手の動き、それから耳の聞こえない方々には手で、あるいは顔の表情で表す言葉で楽しんでいただきます。もしかすると、それぞれ楽しみ方が違うのかもしれませんが、そういう2つのグループが一緒になって同じものを楽しむということ、これは非常に大事なことだと思います。普段はあまりそんなことを考えずにお話の面白さだけを楽しみますけれども、本日は、手を見て楽しまれている方たちは、どういうところに注目して楽しんでいるののだろうか、耳で聞いて楽しんでいる方たちは、一体どこを楽しいと思って見ているのだろうか。そんなことも、ところどころ気になさりながら見ていただくと、普段の落語の楽しみ方とまた違ったものが見えてくるのではという思いで、本日のイベントをさせていただきたいと思います。

今後も色々な催し物をする予定でおります。ホームページなどにも掲載いたしますので、その都度またご覧いただいて、よろしければ是非ご参加ください。

それでは本日は一日、文化イベントを楽しんでいただければありがたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

前座

櫻鶯亭 球箱 （関西学院大学 甲山落語研究会）

演目：『鶴』

櫻鶯亭 右蝶 （関西学院大学 甲山落語研究会）

演目：『蝦蟇^{がま}の油^{あぶら}』

○森本 私は、本日の司会を務めます、関西学院大学手話言語研究センター副長の森本郁代と申します。どうぞ、よろしく願いいたします。

まず最初は、櫻鶯亭^{おうおうてい}球箱^{ぼくす}さんです。よろしく願いします。

○櫻鶯亭球箱 紹介に預かりました、関西学院大学社会学部4回生の櫻鶯亭球箱と申します。よろしく願いします。

本日は、御存知のとおりデフー福さんの寄せということで、前座を務めさせていただくのですが、僕、少し淡い期待を持っております。本日のイベントのポスターに、デフー福さんのお名前があって、前座の僕らもありがたいことに、櫻鶯亭球箱、櫻鶯亭右蝶と名前を出してもらっているのですが、こちらにいる皆さんは、ポスターとかを見て来てくださっているわけですよね。櫻鶯亭球箱？ちょっとこいつ見に行こうかと思って来られた方、手を上げてもらってもいいですか？

お一人ということで、それなりのパフォーマンスでいきますね。僕もそんなに本気を出さずに。（会場笑い）前座らしく頑張っていこうかなと思います。

球箱って、皆さん馴染みがないと思います。何のことだかわかる人いますか？微生物の名前です。馴染み深い微生物で言うとアメーバとかミジンコとかいますが、それらのお友達です。僕、微生物好きとかではないですが、2つ上の先輩に、櫻鶯亭^{おうおうてい}雨葉^{あめば}という名前の人がいまして、その人はその又先輩から名前をもらうわけですし、自分で決められるわけではないのです。だって自らアメーバを選ぶ物好きっていないじゃないですか。アメーバという名前をいただいた当時嫌だったらしく、そんな思いを後輩にも味わってほしいと、そういう思いでつけられた愛のない名前なのです。

野球の球、宝箱の箱で球箱^{ぼくす}。あて字です。僕、中学、高校と野球をしてまして、汗水たらして頑張っていたのです。軟式野球なので、甲子園を目指していたわけではありませんが。箱という字は、当時、少し引きこもり気味だったことからつきまして。今、頑張って笑顔を作ってますので。（会場笑い）というわけで球箱という名前になったわけです。

デフ一福さんは、皆様よく存知上げてると思うので、本日は、僕のことを覚えて帰ってほしいなと思います。頑張りますのでよろしくお願いいたします。。

「鶴」という結構有名なお話です。

簡単なお話でして、賢いおじさんと賢くない人が出てきます。よくこの演目をする時、最後の落ちをフライングで言う人がいるのですが、そういうことがないようにお願いします。

(櫻鶯亭球箱 落語)

○森本 櫻鶯亭球箱さんでした。

次の前座は、櫻鶯亭右蝶^{おうおうていうちよう}さんです。お願いします。

○櫻鶯亭右蝶 ありがとうございます。

次にやってまいりましたのは、関西学院大学社会学部4回生、櫻鶯亭右蝶のほうで、一席お付き合いのほど、よろしくお願いいたします。

僕と櫻鶯亭球箱は、今4回生でして、僕たちの部活は3回生の12月に引退になります。ですので、僕たちは部員ではなくOBなのですが、本日は、ピンチヒッターとして来させていただきました。久々に高座に上がり、皆様の前でお話をさせていただくのはやっぱり緊張しますね。その証拠に、今、少しおなかが痛いんです。うまくできるか不安になっていますけど。

ここで、皆様がどれぐらい笑いに精通しているのか知りたいと思ひまして、ひとつ小ばなしをご用意させていただきました。意味が理解できた方は遠慮なく笑ってください。もし笑い声が少なければ僕のテンションが下がります。

では、話させていただきます。

昔、あるお寺がありまして、若い男がそのお寺に遊びに行きました。そのお寺には池がありまして、その池の中には鯉が泳いでました。その池のそばに、おばあさんが一人立ってまして、ずっと池に向かって何かを投げ続けているのです。妙なところを見てしまったなと思って、その男の人が近づいていくと、やっぱりおばあさんが何かを池に向かって投げ続けているのです。何を投げているのかなと思ひよく見ると、百円玉なのです。百円玉をずっと池の鯉に向かって投げ続けているのでおかしいなと思ひ、その池のそばにある看板を見ましたら、その看板にこう書いてありました。「鯉のエサ、百円」。(会場笑い)

もう帰ってもいいぐらい満足しました。

僕がさせていただくお話は「蝦蟇^{がま}の油」というお話です。落語というのは、一人の人がいて、その人と逆向きに話す人がいて、その二人の会話が面白おかしくなっていくのですが、僕がさ

せていただくお話は登場人物が一人しか出てこない。キャラクターが一人しかいない、少し特殊な落語になっています。

「蝦蟇の油」というのは、日本の伝統芸能でもあるように、口上という売り文句を最初に言うのですが、その売り文句が、僕も意味がわからないのです。覚えてしゃべっているだけなので、そこはあまり気になさらずに、若い男の人がなんか格好つけてしゃべってるぐらいのテンションで聞いていただき、軽く覚えていただけたら、後半部分によくお話を理解していただけるかと思います。

では、お願いいたします。

(櫻鶯亭右蝶 落語)

○森本 櫻鶯亭右蝶さんでした。

手話落語

デフー福（上方手話落語会代表）

演目：『芝浜』、『大仏のほくろ』

○森本 それでは、本日のメインイベント、デフー福さんの落語をお楽しみください。演目は「芝浜」と「大仏のほくろ」です。

では、デフー福さん、よろしくお願ひいたします。

○デフー福 芸能活動がもうすぐ40周年を迎えますが、今、悩みがありまして、40年近くずっと皆さんの前で頭を下げてきたので、足がだいぶ短くなってきてしまいました。もう一つは、だんだん年を重ねてきて、少し髪の毛が薄くなってきたことです。皆さんに一つお願いがあります。皆さんの髪の毛を、一人1本、あとで寄付してもらえませんか。

関西学院大学の皆さんにいただいた髪の毛を、思い出に植毛させていただきます。特に女性の髪の毛はいい香りがするので、一人10本で。男性は1本でいいです。ぜひご協力をお願いします。（会場笑い）

さて私、先程トイレに行きまして、小のほうをしていますと、掃除のおばさんが、何とか何とかと言ってきたらしいのですが、私は耳が聞こえないので気付きませんでした。すると、そのおばさんに肩をばんばんと叩かれたので、おばさんの方を振り向くと、おばさんにかかってしまいました。「すみません…。私、耳が聞こえないのですよ。」と言うと、おばさんは紙にこう書いてくれました。「そこのトイレ壊れてます。」と。もっと早く言ってくれれば良かったのに！（会場笑い）

今から皆さんに一席、お付き合いをいただきたいと思います。一つ目のお話は、人情話です。古典落語なのですが、全部お話すると40分と長いので、皆さんにわかりやすく、少しお話を縮めて、ダイジェストで行きたいと思います。

もう一つのお話は「大仏のほくろ」というお話ですが、まずは人情話、「芝浜」からお話したいと思います。

（デフー福 落語）

○森本 デフー福さん、ありがとうございました。

対談

デフー福 (上方手話落語会代表)

櫻鶯亭 球箱 (関西学院大学 甲山落語研究会)

櫻鶯亭 右蝶 (関西学院大学 甲山落語研究会)

根岸 紳 (関西学院大学名誉教授)

モデレーター：森本 郁代

○森本 それでは、今から対談を始めたいと思います。まず対談の前に、本日のメンバーを簡単にご紹介したいと思います。

まず、私の隣にいらっしゃるのが櫻鶯亭球箱さん、本日の前座の最初を務めていただきました。櫻鶯亭さんは関西学院大学の社会学部出身で、持ちネタが「鶴」「短命」「親子酒」「あくび指南」「子別れ」「^{おし}唾の釣り」です。

他の部員さんからのコメントで、球箱さんは、何と言っても顔芸が上手。落語に出てくる一人一人の感情をうまく表情で表すことのできる演者さんだそうです。先程、少し話していましたが、彼は関西学院大学を非常に愛していて、4年で卒業したくないということで、現在、6年計画を進行させているそうです。よろしくお願いします。

そのお隣が櫻鶯亭右蝶さんで、右蝶さんも関西学院大学社会学部の学生さんです。持ちネタが「鶴」「阿弥陀池」「持参金」「桜宮」「死神」、そして本日の「蝦蟇の油」。他の部員さんからのコメントで、右蝶さんは、塾講師をしていることもあり、人に語りかけるように話すのがとても上手。スピード感もあるので、学生らしい、生き生きした落語を楽しんでいただけたらと思うとのこと。右蝶さんは、塾講師をしているというのは将来を考えてのことですか。教員を目指してらっしゃると伺いましたので。

○櫻鶯亭右蝶 そうですね。塾講師をすることによって、教員になったときに役立つ知識があると思います。

○森本 なるほど、ありがとうございました。

次が、本日、落語をしていただきました、デフー福さんです。デフー福さんは大阪府のご出身で、これは先程わかったことですが、デフー福さんの息子さんと右蝶さんは、実は高校の先輩・後輩であったそうです。本当に世間は狭いなと思います。

デフー福さんは、1979年に、4代目桂福團治師匠の門下となられまして、1981年に、兵庫県

尼崎市にて、初舞台を踏まれました。1992年、大阪の国立文楽劇場にて真打ち昇進となり、ろう者史上初のプロ落語家とされました。そして、1994年に襲名公演をなさって、^{らくふく亭一福}楽福亭一福改め、^{ふくだんしていっふく}福團治亭一福を襲名されます。その後、2001年に、福團治亭一福改め、現在のデフ一福さんとなりました。もうすぐ芸能生活40周年をお迎えになられます。

2016年には、デフ一福独奏会を開催されました。現在、タコ福さんというお弟子さんがいらっしゃるそうです。ご著書に「まいど手話で一席」、また、1998年に、「追跡！テレビの主演」にもご出演されております。後で、また色々お話を伺いたいと思います。

最後は、根岸紳先生です。根岸先生は、関西学院大学の名誉教授で神戸市ご出身です。ご専攻は経済統計学で、特に関西経済、上方経済に関心をお持ちということです。なぜ落語と思われるかもしれませんが、実は、ご趣味が落語とスポーツということで、関西学院大学で、全学の学生を対象とした科目として「大学とスポーツ」、また経済学部の開放科目で、「上方落語と大阪の商家」といった科目のコーディネーターをなさっているそうです。

「上方落語と大阪の商家」では甲山落語研究会にもお世話になったと伺っております。

では最初に、根岸先生に、本日、落語をご覧になった感想をお願いしてもよろしいでしょうか。

○根岸 皆さん、こんにちは。根岸です。よろしく申し上げます。

僕は単なる落語好きで、さっき、山本先生がラジオで落語を聞いていたと言っておられましたけれども、僕も大学時代、寝るときは、ずっとラジオで落語を聞いていました。大学院時代に、ある落語家さんと知り合いました。落語好きが何十年も続いています。落語好きということで、本日は寄せてもらいました。非常に楽しみにしていました。ありがとうございました。

手話落語というのは、福團治さんがされておられると聞いたことはありましたが、本日も初めて見せていただきました。

まず、デフ一福さんの「芝浜」と「大仏のほくろ」は、泣かす話と大笑いさせる話が非常に対照的で興味がありました。通常の落語と違って、やはり手話落語はもの凄く身振り手振りをダイナミックにします。ですので、大変お疲れになっただろうと思います。演壇代わりの机がギシギシいっていたので心配でしたけれども、早く終わってくださったので、机がもったなという感じがしました。

「大仏のほくろ」の話も、大学でする話としては、少し心配な部分もありましたけれども、笑いにするのでオケーかなという気はしました。

「鶴」と「蝦蟇の油」は割とシンプルでわかりやすいお話です。しかし、聞く側も、かなり

想像力を持ち、集中して聞かなければ、なかなか面白さはわかりません。やっぱり二人は4年生だなというのがよくわかるお話でした。

デフー福さんについては、色々な質問を中心にお話を聞かせていただきたいと思います。まず、何遍も聞かれているとは思いますが、なぜ手話落語を始められたのか、そのきっかけをお話ししていただきたいと思います。お願いします。

○デフー福 私は、小さい時から舞台に立ったり、お芝居をしたりするのが好きだったのですが、当時は手話ではありませんでした。本日、先輩も来てくださっていますけれども、当時のろう学校では、手話ではなく『口話教育』という、口から声を出すような教育でした。「杜子春」とか「裸の王様」などを、いつも私は、一生懸命声を出してしゃべっていました。それは、先生に褒められるためであって、みんなを笑わせるためではありませんでした。とにかく自分の成績を上げたいという下心もあって、一生懸命声に出してしゃべっていました、学校の隣の家にまで、私の声が聞こえるぐらいだったそうです。

先生にしてみると、自分の教え子は口話が上手だ、口でしゃべるのが上手だというのが自慢だったそうです。ところがある時、私は文化祭が終わって家に帰る途中だったのですが、先輩たちから、「おまえさ、少しぐらい口話ができるからって生意気なんだよ。ろう学校なんだから、ちゃんと手話を使えよ。」と言われたのです。当時、私の母はPTAの副会長をしていたのですが、先輩は母にまで、「あんたの息子は、どうして手話をしないんだ。」と突っかかりました。その時私は、今まで何のためにお芝居をしていたのだらうと思いました。みんなを笑わせるためではなくて良いのだらうかと思いました。このまま皆が、卒業していくのは気の毒ではないかと思いました。今は色々な情報を字幕で得ることができそうですが、昔は字幕がなくて、「文化」を楽しむことができなかつたのです。ろう者が本当に楽しめる文化が必要なのだと深く反省し、じゃあ、手話で落語をやろうと思ったのがきっかけです。

では、なぜ落語かと言いますと、私は学校を卒業後、歯科技工士の仕事をしていまして、毎日遅くまで仕事をしていました。ある夜遅く、電車に乗っていましたが、今は皆さん、スマホを触ったりしていますが、昔はそんなものがなかったので、吊り下がっている広告を見ていました。その時、隣のおじさんが読んでいた新聞を見ますと、たまたま手話落語という文字が見えたのです。私は、手話は知ってましたが、落語という言葉は初めて見ましたので、何のことかわからなかつたのです。

「落ちる言葉」って何だろうなと思っていると、その隣のおじさんが、何やら私に話しかけながら、新聞をちぎって渡してくれたのです。

そして次の日、職場に行って、歯科技工士の仕事を辞め、もらった新聞広告を頼りに、師匠の家に行きました。そこに入門したのが手話落語の始まりです。

○根岸 ありがとうございます。そうやって、福團治さんのところに入門されたのですね。最初は、どのような弟子の生活だったのでしょうか。また最初に覚えられた落語は、一体、どんな落語だったのでしょうか、教えてください。

○デフ一福 最初、一番苦しかったのは、師匠と一緒に歩くときでした。例えば、桂文枝さんとか文珍さんとか、多くの落語家の先生に怒られたことといえば、師匠と肩を並べてはいけないということです。三步下がって影は踏まないように歩きなさいとよく怒られました。でも、そうすると師匠と話ができないのです。話をするためには、隣を歩かないといけないのです。私の師匠が、「こいつはろう者で、耳が聞こえないから隣を歩くことを許してやってくださいよ。」と言ってくれました。それから隣を歩かせてもらうことを許されました。ですが、あいつは生意気だ、弟子のくせにと他の人から言われたりして苦しい思いをしました。

また、ろう学校時代には、例えば、人の名前の後に「さん」や「様」を付けて呼ぶということはありませんでした。「先生」に対してもそうです。手話の世界では、呼び捨てで呼んでも問題ないのですが、師匠に、ちゃんとした言葉遣いができていないと怒られました。耳の聞こえる人と聞こえない人の世界では違いがあるということを学びました。本当に様々な苦勞をして参りました。

それから初めて覚えたネタですが、当然、下ネタから始めました。師匠が教えてくれたものをひとつご紹介いたします。

電車の中でおじいさんが吊り革を持って立っていました。「おまえさんさ、チャックが開いてるよ。チャックをちゃんと閉めなさいよ。」「ああ、済みません。そっちこそ開いてますよ。」

そんな下ネタから教わりました。それが初めて覚えたもので、今は全部で、140のネタを持っています。

○根岸 それでは、学生のお二人にも同じような質問で、どうして落語を始められたのか聞かせてください。

○櫻鶯亭球箱 デフ一福さんの美しい話の後に僕が話すのも心苦しいのですが、もともと僕は、落語には興味がありませんでした。今の御時世、落語の部員を集めるのは難しいです。落研ありますと言っても寄ってくる人は、本当に学年で一人ぐらいです。その時にどういうものに魅かれるかと言うと、先輩の面白さ、しゃべりのうまさです。僕もこういうふうになりたいと思

って部活に入り、落語はおまけでやっているみたいな感じでした。

でも、やっていると結構面白いものでして、人を笑わせるのはもともと好きなので、楽しんでさせてもらってます。古典落語の難しい感じを取っ払ってするのが結構楽しくて、落語をしていて良かったと思います。

○根岸 では、右蝶さんお願いします。

○櫻鶯亭右蝶 そうですね、球箱が言ったことに尽きると思います。

僕個人では、さっき教員を目指しているという話がありましたが、その前は、一応、芸人になりたいと思っていました。それがどうして教員を目指すようになったのかお話をさせていただきます。笑いを届けるはずなのに真面目な話をして申し訳ないのですが。

ちょうど僕が中学校を卒業する年が東日本大震災の年でして、色々な人が現地に励ましに行くのをテレビで見ている、地震の時に限らず、どんなときでも、心が落ちている方に、何か自分が与えられる仕事がしたいなと思いました。自分はお笑いが好きだから、お笑い芸人になれば、自分が笑われることによって人を幸せにできるのでは、と思ったことが最初のきっかけです。その話が転じて、落研の人に誘われて入ったというわけです。そしてそれと同じように、誰かの役に立ちたいという思いが、教員に気持ちがそれていった理由です。

○根岸 いい話ですね。

○櫻鶯亭右蝶 いい話をしてすみません。(会場笑い)

○根岸 関学の落語研究会の皆さんは、関学出身の小佐田定雄さんを御存知でしょうか。小佐田定雄さんは落語作家で、関西では有名な方です。小佐田定雄の奥さんは、「くまざわあかね」という方で、彼女も、関学の古典芸能研究部出身です。

関学には、甲山落語研究会と古典芸能研究部がありまして、古典芸能研究部は、米朝さんの息子の桂米團治さんをご出身です。甲山落語研究会は、桂文華さん、その弟子の華紋さんをご出身で、また、お二人の1つか2つ上の先輩が落語家になられています。関学は、結構そういう土壤がありまして、何か面白い大学だなと、僕は一人で喜んでます。

それでは、デフー福さんに夢を語っていただきたいと思います。

○デフー福 3,4年前に手話言語条例ができ、全国で手話が言語として認められるようになってきたのは、非常に好機だと思っています。ろう者の場合、字幕も良いですが、中には字幕だけではわかりづらいものもあり、やっぱり手話があったほうが良いと思うのです。これは、手話落語のような文化の普及にもつながります。手話の娯楽番組のようなものももっと入ってきて、例えば、手話落語とか漫才のような番組を制作するのが私の夢です。費用はかかりますが、

必要な事だと考えています。

それから、やはり世界にもっと落語を発信していきたい。今、弟子が二人いますが、二人とも目が見えなくて、耳が聞こえない人、盲ろう者です。コミュニケーションはどうするかと言うと、触手話とって、マネージャーの力を借りながら、手で触って手話で伝えるのです。

一人の弟子は千葉に、もう一人の弟子は福岡にいますので、その二人を大阪に呼んで落語を仕込んでいます。この二人、落語が大好きでして、落語を届けたい、笑いを届けたいという気持ちに心を動かされまして、指導をしています。これからどんどん飛躍して、いずれは、私の後を継いでもらえたらうれしいと思っています。

○根岸 ありがとうございます。甲山落語研究会のお二人も、本日初めて手話落語を聞かれたと思います。日頃からされている落語との違いや、手話落語について何か思ったことがあれば、お話ししてください。

○櫻鶯亭右蝶 初めて見させていただいて、ものすごく衝撃を受けたといいますか、良い意味で大変刺激になりました。同時通訳を聞きながら、デフ一福さんの手話落語を見させていただきました。僕たちが落語をするときは、セリフを口で喋りながら、所作は手を動かすのですが、手話落語は、セリフも所作も手の動きで、同時にしないといけないのですが、それをうまく皆さんに伝えられているのがすごいなと思いました。

あとは表情だとか言葉以外の表現方法は、他の落語家さんより秀でたものがあるのではないかと感じました。どのようなコミュニケーションの場でも、そういうのは大切だと感じました。

この辺で皆さんお分かりになったと思いますが、僕、意外と真面目なことばかり言うので、球箱に変わります。

○櫻鶯亭球箱 右蝶君が真面目なので、僕は真面目なことが言えないじゃないですか。

僕が落語をした時に、通訳をしていただきましたが、僕の出番が終わり、下がってから通訳の方を見ると、僕よりすごく汗をかいておられて、エネルギッシュな言語だなと思いました。

先程、僕は顔芸が得意とご紹介いただき、身振り手振りが武器みたいなのところがありますが、当然、プロの方と張り合うのはおかしな話ですが、全然かなわないな、まだまだだと思いました。あと2年あるので高めていきたいと思いました。

卒業後、就職する予定で、まだ何も決まっていますが、何か世の中に貢献できたらなと思います。頑張ります。

○根岸 お二人の夢を語っていただきまして、ありがとうございました。

僕は、主に上方落語を聞きます。上方落語は「はめもの」とって、三味線・太鼓・笛とい

った出囃子が多いのですが、それは、手話落語ではなかなか難しいですよ。しかし本日、手話落語を見ていると、少し音も聞こえてきた気がしました。

先程、右蝶君が言ってましたが、手話も所作もあって、普通の声の2倍になるというか、だからすごく汗をかくことになるのかなという気がしました。

では、手話落語を聞くことによって、聞いている方にどんな効能というか、手話落語が、聞こえる人たちに対しても、聞こえない人たちに対しても、こんな役割があるよというようなお考えがありましたらお聞かせください。

○デフー福 私はろう文化を通して、手話落語をしていきたいと思っています。ろう文化とえば、例えば、先程ろう者の場合には、「さん」とか「先生」を付けないで、呼び捨てで呼んでも問題ないという例を紹介しましたが、そういったものを落語にのせていきたいのです。師匠の落語にはろう文化の要素がありませんでした。私はろう者向けの落語がしたかったので、独立したのです。ですので、私はろう文化を取り入れつつ、古典落語をどう手話で表すか、その辺りを研究したいと思っています。

例えば、「早い」という手話ですが、昔は着物の裾をまくるような仕草で、「早い」と表現していました。先輩のろう者が、そう表しているのを見たとき、それをそのまま拝借し、古典落語に取り入れました。そのように腕を磨いています。聴者と張り合ってやろう、などという気持ちはありません。ろう者に内容を理解してもらい、笑ってもらえるまで、表現を工夫し、それができたら次、というように頑張っていきたいと思っています。

○根岸 デフー福さんは、上方手話落語会の代表でもおられますが、どういう組織なのでしょう。関東にも手話落語会があるのでしょうか。その辺を教えてください。

また、どういうふうに住んでおられるのか興味がありまして、お弟子さんも抱えられますので大変だなと思います。経済学部の教師としましては、そちらが非常に気になります。

○デフー福 生活していけるのかということですが、これはほとんど奉仕みたいなものです。皆さんに笑いをお届けするということが十分なのです。あまり生活のことは考えていません。

ただ、二人の盲ろう者の弟子に関しましては、大切に育てていくつもりですし、これからも弟子を増やしていきたいと思っています。

私自身は、御存知の方もいらっしゃると思いますが、昔はやせていました。実は、師匠がB型肝炎という病気をされてお酒が飲めなくなりました。ですので、公演後のお酒の席では、師匠のかわりに私がお酒の相手をしなければなりません。周りの方と筆談しようと思って暗くて見えないので、みんな私にお酌をしまして、今ではこのように大仏様のような体格に

なっていました。健康診断でも本当に気をつけるように言われてしまいました。

昔、入門したころは40キロでしたが、お酒をすすめられるがままに飲んでいるうちに、120キロになり、3倍の体重になったことがありました。今、77キロまで戻しましたが、60キロまで減らさないといけません。

○根岸 でも、あんまりやせたら大仏の話はできませんよ。

上方手話落語会は、どんな組織か教えていただけますか。

○デフー福 上方落語会に対して、私は上方手話落語会です。師匠は「日本手話落語会」という全国規模ですが、私は大阪らしい落語を広めていきたいと思っています。関東の方は「笑草会」という江戸落語をやっている仲間がいます。私たちの上方手話落語会とは、雰囲気も違っていています。ただ、古典落語に関して言えば、東京のネタのほうがろう者に分かりやすいのです。米朝さんの「まんじゅうこわい」などは難しいところがありますが、江戸落語の柳家小さんのほうはわかりやすいので、彼のネタを取り入れたりしています。上方落語会は聴者の組織、私はろう者の組織ということになりますので関わりはありません。

先程、甲山落語研究会のお二人は、出囃子で出て来られましたが、私たちろう者には、そういったお囃子はありません。手で合図されたら出ていく。そのようなろう者らしいやり方も、私は気に入ってます。

○根岸 今のお話の中にもありましたけど、僕は「芝浜」という東京の落語で人情話をされるといので、最初びっくりしました。今のお話の中で、上方落語よりも江戸落語の方がやりやすいというのは、人情話だからということでしょうか。

あるいは、東京は三味線などの「はめもの」は使いません。座って、自分の話術だけで勝負するのが粋だとされる世界です。そういうことで、東京の人情話のようなものが向いているのでしょうか。手話落語に向いている落語があるということでしょうか。

○デフー福 古典落語の文章を読みこなすことは、私にとっては、正直難しいです。皆様、御存知かもしれませんが、ろう学校は一般の学校と同じように、学年通りの教科書で勉強していくわけではありません。発音の練習をしなければならないからです。小学校5年生になって、やっと小学校1年生ぐらいの教科書を使うようになるので、教育面ではかなり遅れをとります。

私が小学校5年生のときに、電車の中で、小学校1年生の教科書を読んでいると、「5年生にもなって1年生の本なんか読んでばかじゃないか。」と言われ、教科書を窓の外に捨てられました。大切な教科書を捨てられて腹が立ち、喧嘩をしたことがあります。その後、校長先生がお詫びに行ったそうです。そんなわけで、古典落語を読みこなすのは大変難しく、「まんじ

ゆうこわい」や「犬の目」など、色々な落語の本を読んでも理解できませんでした。

そんな時、たまたま埼玉のろう学校に、福石先生という方がいらっしゃいまして、関学生のお二人と同じように、大学の時から落研に入っている、落語好きな先生でした。その先生は、手話ではできませんので、手話通訳を介して落語をされておられました。

その先生が、生徒から「ろう学校の教員なので、手話を覚えて落語をされてみてはいかがですか。」と言われたそうです。そこで福石先生は、ろう者にも分かりやすいように落語を少しアレンジして、原稿を書ってくれたのです。私が福石先生に手話を教え、福石先生からは文を教わり、そこで初めて「まんじゅうこわい」を披露しました。今では、それが私の十八番となりました。その後、「犬の目」を覚え、現在では約30作の古典落語と、約110作の創作落語を持っています。

○根岸 ありがとうございます。

○森本 私からも感想を言わせてください。私は、本当に落語は素人で、モデレーターを引き受ける際、それが本当に心配でした。そのため、本日は少し予習もして参りましたが、デフー福さんの落語が手話でされるということは、手話を音声に翻訳したものを聞き、デフー福さんの所作を見て理解をする、という流れがあるのだろう、そして、そこには何かきつとずれがあるだろうと、すごく心配していました。

実は、最初は少しずれを感じてたのですが、段々、手話落語を聞いているうちに、デフー福さんの動きとか表情、音声の通訳がうまく馴染んで、気がついたらすごく笑っていて、とても楽しめました。多分、多くの方が同じように思われたのではないかと思います。

甲山落語研究会の二人にもすごく笑わせてもらいましたし、デフー福さんの落語も本当に楽しめました。少し落語に興味が出てきたので、繁昌亭にも行ってみたいと思いました。最初はYouTubeで、もう少し勉強した方がいいかもしれませんが、本当に、どうもありがとうございました。

それでは、フロアの皆さんも、聞いてみたいことがおありかと思いますので、質問やコメントがある方、挙手をお願いできますでしょうか。

○質問者 デフー福さんの、お弟子さんの落語との出会いを知りたいです。

○デフー福 私には二人の弟子がいると言いましたけれども、どうして、この盲ろう者の二人が落語に興味を持ったかということですが、中学・高校までは、二人とも目は見えていたのです。

私がプロになった頃、学校や聴覚障害者協会など、色々なところをまわって、一年に80公演とか100公演をしていました。それを見て自分も落語をやりたいと思ったそうで、私は弟

子に迎え入れました。その後、失明してしまったのです。「目が見えなくなってしまったのだから、落語なんか無理だな。」と私が言うと、「いやいや、そんなことはありません。触手話で理解できますし、見えていた頃のイメージが記憶として残っているのでできます。」と言ったのです。私は、それを聞いて感動しました。

「でも、大阪まで電車・飛行機を乗り継いで来るのは大丈夫なのか。」と聞くと、盲ろう者協会などに介助を頼んで、私の家まで行くので大丈夫だといいました。触手話で指導をし、また介助の人にきてもらって帰っていく、というような指導をしています。

○森本 他に、ご質問はございませんでしょうか。

○質問者 私も、学生のと看に同じような経験をしました。口話教育が厳しかったということで、いじめられたこともありました。昔は教育が厳しかったですね。

先輩でも、やはり口話教育を受けた方が多くて、私の世代ぐらいから手話が大切だということに気づいたと言いますか、手話を使わない世代から見ると、手話を使うことが増えてきたように思っています。

やはりろう者には手話が必要だと思いますし、関西学院大学に手話言語研究センターができたということを、非常に私は喜んでおります。こういう動きが、もっと日本で広がっていけばよいと思っております。

本当に、本日は感動しました。楽しい手話の企画をありがとうございました。

○デフー福 今のお話を聞いて、私はとてもうれしかったです。彼女は同じ学校の先輩で、昔は手話が禁じられていた時代で、それは教育委員会に問題があったと思っています。昔は手話を禁じて、口話を教えなければいけなかったので、口で話す子は褒められて、手話を使うと棒で叩かれました。今で言う虐待ですよ。昔はそうやって我慢して、口でしゃべることを強制されました。今頃になって遅いかもしれませんが、やはり教育を変えていく必要があると思います。

今、手話言語条例が広がってきて、関西学院大学にも手話言語研究センターができました。何十年も続けていってほしいと思います。イベントが終わったからこれで終わりではなくて、どんどん手話言語研究センターの地位を高めていってほしいと思います。そのためには、皆様の御協力もよろしくお願ひします。

○森本 他に、ご質問はございませんか。

○質問者 本日はありがとうございました。

手話落語を、本日、初めて見たのですが、非常に衝撃を受けました。聴者の文化とろう者の

文化は異なると思いますが、それを落語を使って橋渡しをされている部分に、非常に感銘を受けました。デフー福さんもお話しされたように、ろう教育の辛かったことも、笑いに変えてお話しできるところが素晴らしいと思い、もっと手話落語が広がっていけばいいなと思いました。

関学生のお二人も、本日、手話落語を見て、手話やろう者に出会って、色々思われたこともあると思います。今後、手話やろう者のネタを取り入れた落語を作ってくれるとうれしいのですが、何か頭の中に浮かんでいることはありますか。

それから、デフー福さんが先程、ネタが140ぐらいあるとおっしゃっておられましたが、その中に、聴文化とろう文化の橋渡しができるようなネタがあったら、ご紹介いただけないでしょうか。

○櫻鶯亭右蝶 落語は基本的には、昔の方々が考えた台本を、それぞれの方が自分ふうアレンジをして披露するものです。僕らも、プロの方の落語を見たり聞いたりしたものを、自分でノートに起こし、学生がして面白そうな感じに変えているので、自分で作るとなると、もの凄く時間と労力がかかると思います。

先輩の中には、自分で創作した落語をしている人もいますが、残念ながら、僕にはそういう創作の才能が乏しいと思います。ちょっと変えるぐらいが僕には限界です。どう思うかわからないですが、球箱はセンスがあるので、多分、新しく作り出せると思います。どんな話を思いついたか、聞いてみましょう。

○櫻鶯亭球箱 デフー福さんの落語を見まして、先程は、結構真面目な感想を言わせてもらいましたが、本当のところを言うと「芝浜」と「大仏のほくろ」の2話をされるのは、少しずるいと思っていました。人情ネタで堅めの話をし、その後少しすげべな話をする。そういうのを込みでの面白さというのを見せつけられました。いやらしいお話はどこでもうけるなど、改めて思いましたし、大仏様を見て、そういういやらしい話が浮かぶデフー福さんは、相当すげべだと思えます。

落語は、人にどう伝わるかという話し手の想像力が大事というのですが、僕は全然足りなかったと思います。大仏を見て、そんないやらしい話は絶対浮かばないので。改めて、一から戻るといふか、落語は落ちる話じゃないですか。その落差が大きい程、面白いと思います。大仏という神聖なものといやらしさ、そういう落差を、本当に奇抜な発想で創り上げていきたいなと思います。

○デフー福 実を申しますと、自由の女神はもともととても真面目なお話でした。ところが、イギリスやドイツ、フランス、韓国、アメリカなどの外国に行って、このネタをすると、「立派

過ぎる話になっていて、何かつまらないね。少し色っぽい話を加えてみたらもっと面白くなるのでは？」と言われました。自由の女神だって人間らしいところがある。女性らしい部分を使えばどうかと言うのです。なるほど、これが外国の文化なのかと思い、勉強になりました。

さて、海外のろう文化の話をご紹介します。

ろうの猟師が、電線にとまっている鳥を撃とうとしています。糞をするから困るということで撃ちましたら、一羽だけ飛び立たない鳥がいました。お前どうしたんだと聞くと、耳が聞こえない鳥なんだという話がありました。

世界中に、ろう文化を使った面白いジョークみたいなものがあるのです。そんなものを、私は、落語の中に取り入れるようになりました。

もう一つをご紹介します。

エレベーターに乗りましたら、皆、手話で話していました。そこにおならをした人がいました。みんな、ろう者だと思っていたら、ある人が、携帯電話を取り出して誰かと喋り出したのを見て、何だあの人は耳が聴こえていたのか、私のおならの音を聞かれてしまったという笑い話です。

そういうオチを落語に取り入れていけば良いのだと教わりました。ろう者の生活や文化を通して落語を研究していきたいです。

○森本 デフー福さんに質問をすると落語の続きが見られるようで、すごく得をした感じです。

どうも、ありがとうございました。

それでは、時間になりましたので、対談はこれで終了したいと思います。どうも、皆さん、ありがとうございました。

最後に、私どもセンターの研究者である松岡からご挨拶をさせていただきます。

閉会の辞

松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）

○松岡 関西学院大学手話言語研究センター研究員の松岡と申します。

爽やかな5月の日曜日となりました本日、当センター主催文化イベントにお越しいただきありがとうございます。午後のひとときを、手話落語でお楽しみいただけたのではないかと思います。

私ども、関西学院大学手話言語研究センターは、日本財団の助成を受け、手話言語の研究と、手話は言語であることを広く一般に広めていく活動をしています。手話に関わる文化的な側面を取り上げる文化イベントで、落語を取り上げましたのは、手話を含めた言語も広い意味での文化であるということ、又、5月5日が「手話の日」でありまして、それに近いタイミングの本日に、手話落語をテーマとして文化イベントを開催させていただいた次第です。

私は難聴者です。しかし、手話は分かりません。落語については、ラジオで聞いても聞こえず、テレビも字幕が付いているわけではないので敬遠していました。「しゃべれども、しゃべれども」という映画を御存知でしょうか。若手の落語家の成長を描いたものですが、その字幕入りのDVDを見まして、初めて落語は面白いということに気付かされました。確か「火焰太鼓」が字幕入りで演じられていました。とても面白かったです。

さてここまでで私が何を言いたいかと言うと、私のような難聴者にとっては、音声言語の落語であっても、あるいは手話言語の落語であっても、一旦、それを字幕にしてみないとわからないのです。字幕で落語を見る、そういう楽しみ方もまたあるということを知ったのです。ろう者には、手話落語というろう者の楽しみ方があり、そうした楽しみ方の広がりという意味では、落語も進化・発展していているということが、本日のデフー福さんの一席で学ぶことができたのではないかと思います。

本日は合計して4つの演目をご覧いただきました。私は初めて手話落語を見たのですが、根岸先生もおっしゃっていたように、デフー福さんはとても表情が豊かで、身振り手振りの動きがとても大きかったですね。もともと落語は、一人漫談というところがあると思いますけれども、まさしく漫談を見ているような、もっと言うと歌舞伎でも見ているような、そんな印象を手話落語から受けました。

今は、英語でも落語が演じられる時代ですので、英語落語、手話落語なんて江戸時代の人間からするとびっくりすることだと思います。しかし考えてみれば、お寿司もアメリカに渡って、

カリフォルニアロールみたいな形で楽しまれています。それは、他国である日本の文化を受け入れた、カリフォルニアの人たちの懐の深さを表しているのではないかと思います。そういうふうに考えますと、手話落語は、ろう者の方の懐の深さを表しているのではないかとも思いました。

以上、少し難しい話をしましたけれども、本日は、聞こえる人も、聞こえない人も、落語を聞いて、あるいは見て良かったなと思ってくださったら、本日のイベントはまずは成功なのではないかなと思っています。本当に、皆様、ありがとうございました。

○デフー福 皆様、また会いましょう、お元気で。ありがとうございました。

登壇者紹介（登壇順）

やまもと まさよ
山本雅代

（関西学院大学国際学部教授／手話言語研究センター長）

おうおうていぼるぼくす
櫻鷺亭球箱

（関西学院大学 甲山落語研究会）

おうおうてい う ちよう
櫻鷺亭右蝶

（関西学院大学 甲山落語研究会）

で ふ い ぶ く
デフー福

（上方手話落語会代表）

もりもと いくよ
森本郁代

（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）

まつおか かつひさ
松岡克尚

（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）

□当報告書は、2017年5月14日に関西学院大学大阪梅田キャンパスで開催された手話言語研究センター文化イベントの内容を再現したものである。

尚、落語の部分は、著作権保護の都合上省略とする。

手話言語研究センター文化イベント

開催日時 2017年5月14日 13:30～16:30

開催場所 関西学院大学大阪梅田キャンパス

主催 関西学院大学手話言語研究センター

手話言語研究センター文化イベント報告書

2017年10月17日発行

編集 関西学院大学手話言語研究センター

発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014
